

座長のまとめ

第1群の座長をつとめて

富澤 ゆかり
(金沢赤十字病院)

第15回石川看護研究会学術集会の第1群の座長を務めさせていただきました。第1群は、顕在化した症状に着目し、研究として取り組んだもの4題の発表でした。

第1席の国立金沢病院、加藤美奈子さんは、実施したケアによる対象の変化を、KOMIチャートを用いて明らかにした事例研究でした。「KOMIチャートを使用したことで、病名や症状だけにとらわれず生活過程をみることができた。さらに、その人らしい生活の質を高めるために必要な援助を考えることができた。」と報告されました。

会場からは、KOMIチャートのチェック項目は煩雑であり、チェックしながら看護計画の追加修正を実施することの困難さを指摘されました。それに対しては、事前に対象患者の情報を得ていたため、事前学習する時間が確保できたこと。研究中は、毎日訪問することにより、患者の状態を的確に把握することができ、計画にも活かすことができたと返答されました。

第2席の金沢大学医学部附属病院、中村一美さんは、化学療法の副作用の一つである口内炎に着目し、その発生過程を明らかにしました。これは、口内炎の要因を明らかにした前回の先行研究に基づく発展的研究でもあります。

会場からは、サイロリック含嗽の内容や投与方法、そして、化学療法を受ける患者に対しての関わりについての質問がありました。これに対して、

家族をも含めたインフォームドコンセントの重要性と看護者の関わり方について説明がされました。

第3席、第4席は、石川看護研究会、褥創研究プロジェクトによる発表でした。

第3席の石川県済生会金沢病院、越村洵子さんは、リハビリテーション期の患者の褥創発生の実態と発生要因に関する実態調査の報告でした。

第4席の金沢社会保険病院、野村り美さんは、脳外科、内科混合病棟における高齢者を対象に実施した実態調査の報告でした。

どちらも今後の看護ケアの方向性が導き出されていました。しかし、診療科別により研究することで、看護ケアにどれほどの意味があるのかは疑問です。普遍性に富んだ援助を導き出すための研究とするには、患者の状態に着目し研究することが重要ではないかとの声もありました。

今回、座長という大役をいただき、当初は大変困惑しました。しかし、当日は会場の皆さまから多くのご意見やご質問を頂き、活発な意見交換ができたと思います。また、研究発表をされた皆さまの姿を見ることは、日々業務に流されてしまいがちな私には、大きな刺激となりました。まずは、疑問に感じていることを言語化、文章化してみることから始めてみようと、気持ちを新たにしたい一日でした。

最後になりましたが、今回の研究者の皆さまの益々のご活躍をお祈りいたします。